

ボ  
イ  
ス  
ド  
ラ  
マ  
脚  
本

灼  
熱  
と  
花

作 景山伸子ナ  
デ  
ィ  
ア

## 登場人物

アズハール（14）（19）（21）侍女

ラシーダ（15）王女

アクラム（20）一座の団員

マルジャーナ（38）一座の長

ジャラー（31）（35）王妃

王（40）

サハル（4）

侍女

兵士 A

兵士 B

## 中東風の音楽。

アズハールM「遙か昔、この灼熱の地では、  
平和なときが長く続いた。やがて生まれる  
悲劇を知らない頃、私は小国シュダニアで  
王女ラシーダ様の侍女として暮らしていた」

侍女たちの笑い声。

足音がゆっくりと止まる。

ラシーダ「アズハール、こうして目を隠した  
ら、鼻が利くあなたでもわからないはずよ。  
飲み物に入っている花の香りは？」

アズハール「アザギムとリダニ、ほのかにサ  
リーンファも」

歓声が上がる。

ラシーダ「外すことがないわね。さ、皆の者、  
全て片付けて。さすがね、アズハール」

アズハール「長年ラシーダ様の毒味を担当  
しておりますゆえ、間違えるわけにはい  
きません」

ラシーダ「その嗅覚、神からの贈り物だわ」  
アズハール「でも最近この鼻が嫌なのです」  
ラシーダ「何かあって？」

アズハール「先日、宮殿に食事を運ぶ男か  
ら、甘くうっとりする……でも、その瞬  
間背筋がゾツとするような香りがしまし  
た。目を閉じた瞬間、赤い色も浮かび……

……男は心臓の病で亡くなったそうです」  
ラシーダ「まさか……」

アズハール「そんなわけではないと思うのです  
が、あの甘く恐ろしい香りが忘れられず……  
……」

ラシーダ「偶然よ。お前のその力でこれから  
も私を守っておくれ」

アズハール「この命があるのはラシーダ様  
のおかげです。奴隷になる運命だった私  
がこうして暮らせるなんて……。生涯こ

の身はラシーダ様と共に」

アズハールM「私が暮らしているシュダニアの周辺には三つの国がある。灼熱の地の中心であるダヴァク、そして、小国リファダンとサラーン。それぞれが同盟関係にあったが、やがてその関係に歪みが生まれた。砂漠から貴重な資源が見つかったのだ。その歪みは少しずつ大きくなっていったが、それには気付けなかった」

### タイトル『灼熱と花』

遠くで音楽。

ラシーダ「大丈夫よ、アズハール」  
アズハール「ラシーダ様の代わりなど」  
ラシーダ「ベールで顔を隠していたら気付かれないわ。ほら、私たち背丈も似ているし」  
アズハール「でも」

ラシーダ「お願い。私も15。いつ他国に嫁に行くかわからないわ。お義母様は早く私に出て行って欲しいようだし」

アズハール「それは、ジャラー様が将来を考えてくださってのことではないでしょうか」

ラシーダ「本当の娘じゃないからかしら。あの人はやっぱり心が通わない気がするわ。美しい人だけど、産んでくれたお母様みたいには温かみを感じない。でも、仕方ないわね。お父様を選んだ人だから」

アズハール「そのようなことを仰らず……」

ラシーダ「お父様とお義母様の様子も最近ピリピリして息苦しいし、とにかく私は城外に行きたいの。私自身の目で見たいのよ、この国を。必ず明日の朝には戻る。護衛の者とも離れないわ。約束する」

アズハール「……承知しました」

ラシーダ「頼んだわ。もし誰かに見つかりそうになったら、この隠し扉から出て。宮殿の裏口に繋がっている秘密の道よ。それか

ら」

首飾りの宝石が揺れる音。

アズハール「これはシュダニア王家の大切な  
……」

ラシーダ「そう。代々受け継ぐ赤い宝石の首飾り。私が帰るまではお前がラシーダよ。  
明日の朝まで頼んだわ」

走り去る足音。

優雅な音楽が急に歪になる。

アズハール「甘くて恐ろしいこの香り……。まさか。ラシーダ様、お待ちください！」

ドアが閉まる音が響く。

アズハールM「そんな訳がない。きっと私の思い違いだ……」

鳥の鳴き声。

アズハール「朝……早くお戻りになって」

ドアが開く音。

ラシーダ「アズハール」

アズハール「ラシーダ様！ 良かった」

ラシーダ「身代わりをありがとう」

アズハール「さっ、元のお召し物に」

優雅な音楽。

ラシーダ「王宮の外の世界が見られて良かった。私、ずっと忘れないわ」

アズハール「ラシーダ様、あとはこの首飾りを（と言いかけ）」

音楽が歪になり、重なる。

アズハール「うっ……またこの香り……赤い色もこんなに……どうして」

遠くから複数の悲鳴。

ラシーダ「一体なに！？」

アズハール「まさか……ラシーダ様はここに」

ラシーダ「私も行くわ」

アズハール「ですが」

ラシーダ「行きます。付いて来なさい」

走る足音が止まる。

剣が交わる音。悲鳴。

ラシーダ「あの紋章はダヴァク……！」

アズハール「同盟国の兵士たちがどうして」

ラシーダ「あ、お義母様！」

アズハール「ジャラー様！」

駆け寄るラシーダの足音。

ジャラー「ラシーダ……」

ラシーダ「お義母様、なぜダヴァクの兵が」

ジャラー「私が呼んだの」

ラシーダ「え……」

ジャラー「王宮内の者の命を奪うようにと」

ラシーダ「どういう……こと？」

ジャラー「こうするしかなかったのよ」

アズハール「ジャラー様……」

悲鳴。

兵士A「王の首を取ったぞ！」

ラシーダ「父上！」

兵士A「そなたラシーダ姫か。探す手間が省  
けた」

ラシーダ「よくも王を……。父の仇！」

走る足音。

アズハール「姫様、なりませぬ！」

兵士A「その命もらった！」

ラシーダが斬られる音。

アズハール「ラシーダ様――！」

駆け寄る足音。

アズハール「ラシーダ様……どうしてこんな  
ことに」

ラシーダ「守って……首飾、り……」

アズハール「ああっ！」

兵士A「なんだ？　女、それを見せろ！　あ、  
待て！」

走る音。アズハールの乱れる息。

アズハールM「ラシーダ様、申し訳ありま  
せん。ラシーダ様」

ラシーダの声（回想）「もし誰かに見つけられようになったら、この隠し扉から出て。宮殿の裏口に繋がっている秘密の道よ」

アズハールM「ラシーダ様が教えてくれた道を通り、王宮を駆け抜ける。心臓と首飾りの揺れる音は耳まで響くのに、外の音は全てが遠い。王宮の外では、灼熱の太陽が痛いほど体を照らす。張り裂けそうなこの心も、血が流れるように痛くて熱い」

## 風の音。

アズハールM「それから五年の月日が流れた。私は隣国リファダンで……」

## 中東風のダンス音楽。

アクラム「さあ次は我が一座の一番人気！  
アズハールのソロダンス！」

歓声。やがて遠くなる。

袋からお金を出す音。

マルジャーナ「これだけの金あれば、全員分の新しい衣装が買える。もちろんアズハールの分も」

アズハール「マルジャーナさん、ありがとうございます  
ございます」

マルジャーナ「お前、いくつになったんだい？」  
アズハール「十九になります」

マルジャーナ「あつという間だね。拾った

時はあんなに子供だったのに」

アズハール「一座の皆さんのお陰です」

マルジャーナ「嫁に行く気は？ 金持ちの

客もたくさんいるだろ」

アズハール「……」

マルジャーナ「まあ、幸せは自分で決めれば  
いいさ。（小声で）アクリムの夢は叶わなそ  
うだけど」

ドアが勢いよく開く音。

アクラム「余計なこと言うな！ ババア」

マルジャーナ「デカイ声出すな、バカ息子！

……で、なんだい？ アクラム。花なんて  
持って」

アクラム「いや、これは別に」

マルジャーナ「ああ、なるほど。じゃあ、私  
は衣装でも店に見に行くかね。アズハール、  
ゆっくり休みな」

アズハール「はい」

ドアが閉まる音。

アクラム「アズハール、あのさ」

アズハール「綺麗ね。その青」

アクラム「サリーンファっていうらしい。花  
売りが言うには、シュダニアによくあるつ  
て」

アズハール「……そうね。じゃあ、私は用

があるから」

アグラム「え、あっ……」

遠くで音楽。

アズハールM「この世の富は一箇所に集まる。それがあの国・ダヴァク。煌びやかな王宮には優雅な音楽が流れ、有り余る美食の話は、ここリファダンまで届く。四つの国々が同盟関係だった頃からこの五年で状況は変わった。ダヴァクは周辺の小国を次々に収め、領土を拡大。そして、その国王の横には、新しい王妃がいた。残酷な美しい人と称される王妃の名はジャラー。元いた夫と娘の屍を踏みつけ、のし上がった裏切り者の女。……その噂を聞きたびに過去の記憶が蘇り、血が燃えるように疼く。この身が生かされた理由があるならばただ一つ。あの女に復讐するため。シュダニアの民が忘れても私は決して忘れない。許さない」

夜の虫の声。

アクラム「ダヴァクの王宮でショー！？」

マルジャーナ「ああ、アクラム。こんなチャ  
ンスが巡ってくるなんてねえ。王宮でのシ  
ョーの内容は、アズハールを中心に組む。  
頼んだよ」

アズハール「精一杯踊ります」

マルジャーナ「ショーは三日間。前夜から  
王宮へ入る。国王から気に入って貰えば、  
この世の勝ち組だ。頼んだよ、みんな！」

一座の歓声。やがて遠くなる。

アズハールが深呼吸する。

アズハールM「遂に機会が来た……」

アクラム「アズハール」

アズハール「アクラム」

アクラム「さすがに緊張するか？」

アズハール「アグラムは優しいわね」

アグラム「いや、それは……あー、それより

シヨ―楽しみだな」

アズハール「そうね。やっと夢が叶う」

アグラム「夢？」

アズハール「ずっと願っていたこと。それ以上願うことなんてないほどに」

近づく足音。

アグラム「これ、もらってくれないか？」

アズハール「サリーンファの首飾り……」

アグラム「この青い花、よく見てたから、好

きなんでしょう。言い伝えによるとサ

リーンファは身を守るらしい」

アズハール「ええ。……綺麗な青」

アグラム「アズハールの踊りは一座の一番人

気だ。きっと王も観客も期待してる。いい

踊りができるようにお守りみたいなもんだ

から」

